

## 台湾文学のおもしろさ

松 永 正 義

わたしにとって台湾文学とは、研究すればするほどわからなくなる、それだけにまた限りない興味をかき立ててくれる対象なのですが、そのおもしろさを一言でいうのは難しいので、その時々でわたしが何に興味を持ってきたのかを書いてみたいと思います。

わたしが台湾文学に関心を持ったのは、大学3年目の1970年のことです。ちょうど大学闘争の時代で、大学で何を勉強するのか、何のために勉強するのかといったことを考えざるをえない時代でした。また日本とアジアの関わりが問題になっていった頃で、国外では、日本の経済進出に対して、エコノミック・アニマルといった東南アジア諸国からの厳しい日本批判が起こってきた頃であり、また国内では、今では伝説となった感のある新宿西口のフォークゲリラの集会の隣で、華僑青年闘争委員会の人たちが、出入国管理法案反対の座り込みをやっていた時代なのです。当時日本の入管当局は、台湾の政治犯を捕まえては台湾に強制送還し、送還された人たちは重刑に処せられていました。（強制送還については、森宣男『台湾／日本——連鎖するコロニアリズム』に記述があります）中国文学科に進学しようとしていたわたしにとって、日本とアジアの関わりを考えるということは、日中関係を考えることであり、そのためには日中関係の原点とも言える台湾の植民地化の問題を考えなければならないと思うようになるのは自然なことでした。

しかしながら当時の日本では台湾研究はほとんど行われていないといってもいい状態でした。というのも日本政府は1972年の日中国交回復まで、中華人民共和国に対する敵視政策をとり、台湾の中華民国政府、つまり蒋介石政権だけを正式

の外交相手としていました。そして台湾研究をすることはそうした日本政府の政策を支持するもののように受け取られ、台湾研究をタブー視するような雰囲気は学界にあったからです。それでも70年代には、王育徳、戴國輝、許世楷、黄昭堂、劉進慶といった在日台湾人研究者の研究が公刊されはじめました。しかし日本人の研究はほとんど尾崎秀樹『近代文学の傷痕』一冊だけと言ってもいい状態でした。もっともこの本は今でも台湾文学のいい入門書だと思います。

台湾研究がタブーだったのは日本だけではありません。台湾でもまたそうだったのです。蒋介石政権にとって、中華民国が中国を代表する唯一の正統政府であるという建前は、政権の存立基盤に関わる重大事でした。対外的にはそれは大陸との内戦＝冷戦の最前線に自らを位置づけることで、アメリカ、日本の軍事的、経済的援助を引き出す意味を持っていましたし、対内的には台湾の人たちの代表権を「中国」という大きさの中の一部に押し込めることで、実質的にその発言権を奪う意味を持っていました。1948年に中国全土で行われた選挙で選ばれた国会議員が、92年の全面改選まで議員であり続け、台湾の民意をほとんど反映していなかったのがその良い例です。「台湾」について語ることは、この「中国」という建前を掘りくずす可能性を持つものであり、それ故台湾を研究することは厳しく弾圧されたのです。

大陸ではどうだったかというと、政府の公式見解以外の形で台湾について語ることは、やはりタブーでした。台湾とつながりを持つものは、容易に国民党のスパイと見なされ、台湾出身者は台湾出身であることを隠して暮らさなければならぬ状態でした。そうしたタブーが解けてきたのは、80年代後半頃からで、台湾の資本がたくさん大陸に入っている今ではそうした迫害は過去のものとなりましたが、しかし現在でもまだ台湾問題はイデオロギー規制の強い問題で、公式見解をはずれた台湾研究は、困難であるように見えます。

在日台湾人の台湾研究は、こうした背景の中で行われてきたもので、日本で台湾研究の道を選ぶということは、台湾へは帰れないと決意することでした。そしてそれを受けるべき日本人の研究はほとんど行われていない状況でした。たとえばアジア経済研究所の『日本における発展途上国の研究——「アジア経済」100

号記念特集』(1969)掲載の戴國輝による台湾研究の総括は、そうした日本における台湾研究の現状を厳しく批判しながら、それでも台湾研究をおし進めていかなければならないとする気迫に満ちた文章でした。

わたしが友人の若林正丈君に連れられてその戴さんに会いに行ったのが、1970年の秋だったかと思います。戴さんは初対面のわたしに呉濁流の本2冊とコピーカードを渡し、コピー室で全冊のコピーを取ってこさせ、それをわたしにくれました。それがわたしの読んだ最初の台湾文学でした。その後戴さんの尽力でそのころ日本で出版された呉濁流の選集や、『アジアの孤児』を読みました。

とりわけ『アジアの孤児』は、日本の植民地支配下の台湾で、ひとりの知識人がどのように生き、どのように考えていたのかがよくわかる、すぐれた自伝的小説です。「孤児」という意味は、中国(清朝)から見放され、切り捨てられて日本の植民地となり、また日本の中でも植民地として差別されている台湾の状態を言ったものです。そしてまた70年代にそれを読んでいるわたしにとっては、国民党政権の「中国」の名による支配に苦しめられ、大陸は遠い世界であり、かつての宗主国である日本はまた植民地支配の責任をとることなく新たな経済進出をはじめつつある、そうした台湾の戦後の状況とも重なるように思われました。日本政府が、日本人として戦争にかり出された旧植民地の元軍人、軍属や、従軍慰安婦に対して、長い間なんの補償もせず、いまだに不十分な状態にいることは、よくご存知でしょう。

といってもこの小説が書かれたのは1943年ごろからのことで、日本時代ですからもちろん発表できるわけもなく、何枚か書いては原稿を炭箱のなかに隠し、枚数がたまるとそれを故郷の家へ持って行って隠す、といったふうにして書かれたものです。たとえ読まれるあてがなくても、書き残しておくべきことは書いておかなければならないとする呉濁流の決意があったのです。ついでに言えば呉濁流はもう一度同じことをしています。『台湾文芸』に連載され、日本の雑誌『中国』に転載されて、『夜明け前の台湾』に収録された『無花果』がそうです。この自叙伝で呉濁流は、台湾の戦後史を規定し、それゆえずっとタブーとされてきた二・二八事件の回想を思いきって書いたのです。書きあげてすぐ呉濁流は、様子

を見るために海外へ出たそうです。さいわい直接の弾圧はなく、単行化された『無花果』が発行禁止にされただけで済みました。

その後の民主化運動のなかで書かれたものもそうですが、台湾文学の背後には間接的にしか書けないこと、あるいはまったく触れることのできないことがらが無数にあって、そうした行間や文章の背後にある膨大な沈黙こそが、文章に輝きを与えているようにわたしには思われました。そしてそうした文学のありかたは、日本文学のなかでの経験とはまったく異なるもののように感じられました。これがわたしの台湾文学への入り口だったように思います。

これはまあ冗談としていうのですが、この世の中には、言論の自由があつてことばに力のない社会と、言論の自由がなくことばに力のある社会と、ふたつの社会があつて、日本は前者に属し、台湾や大陸は後者に属しているように見えました。その後80年代後半ごろから台湾は前者の社会に移行しはじめ、少し遅れて大陸もまた前者に移行しつつあります。それにとまってこれらの地域にも日本と同じく、別のかたちでの文学の困難が現れてきたように思います。大衆消費社会のなかでの文学の問題です。戦後台湾では魯迅は長らく禁書とされ、読むことはできませんでした。だからこそ隠れてそれを読んだ人たち、たとえば陳映真のような作家には大きなインスピレーションを与えてきたのです。80年代ごろから台湾でも魯迅が解禁され、何種類かの選集が出ました。しかしそのころにはもう誰も魯迅には特別な関心を払わなくなってしまったように思います。

これは陳映真さんの話ですが、86年だったかに民主進歩党によるデモを見に行ったそうです。民主化運動のなかでもかなりエポックメイキングなデモだったので、カメラを持って行って、交差点の二階のマクドナルドから全景を撮ろうとして、気がついてみたら店内の若者は何も知らぬふうには、楽しそうにおしゃべりしていたそうです。そうした豊かさが国民党のむき出しの弾圧を押しとどめた一因でもあるのでしょうか、同時に文学をふくめてすべてのものを商品化し、コピー化していくこうした社会のありかたが、ことばの輝きを奪ってゆくわけでもあるでしょう。

話をもどしますが、呉濁流は『アジアの孤児』を、もちろん日本語で書いたの

です。呉濁流は1900年生まれで、このあたりから30年生まれくらいまでの三〇年間の世代は、基本的に日本語で教育を受けていますから、日本語がよくできます。というより日本語でしかものを考え、ものを書くことができなくなっていたと言ったほうがいいのかもかもしれません。だからみんな戦後には、日本語から中国語への言語の切り替えに苦しんだのです。鍾肇政という作家は、はじめ日本語で書いてみずから中国語に訳し、数冊そうした練習をしてから、頭のなかで日本語で考え、中国語に訳してから書けるようになり、また数冊の練習の後やっと中国語で考え、そのまま中国語で書けるようになったそうです。

こうした言語の切り替えの期間は、国民党政府の弾圧のもっとも厳しかった時期でもありますから、切り替えに成功して書き続けた作家よりも、沈黙のなかで書くことをやめていった作家のほうがずっと多かったのです。呉濁流はこうした言語の切り替えに成功した数少ない作家のひとりですが、それでもものを書くのは日本語によってだったようです。中国語で書くと文章が硬くなってしまうので、呉さんの持ち味のふんわりした雰囲気を出すためには、日本語で書いて、自分で中国語にするのだとおっしゃっていました。雑誌『中国』に連載された『無花果』は、編集部訳となっていますが、実は呉濁流さんの原文で、ただ『中国』のような雑誌と関係を持ち作品を載せたということが、問題化するのをおもんばかって、編集部訳としておいたのだそうです。

ところで、日本語でしかものを考え、ものを書くことができなくなっていた、と言いましたが、これは実は正確ではありません。1920年代には、中国の五・四運動の影響を受けた新しい抗日運動がもりあがり、その中には中国語で書くことも盛んに行われたからです。呉濁流が比較的うまく中国語で書けたのも、そうした時代を経験していたからかもしれません。しかしそんなふうにならぬ中国語で自己表現できた人は、戦後も持続して創作できたかという点、そうはいきません。きびしい言論弾圧があったからです。またそうした運動の壊滅した30年代以後に自己形成した世代は、文字通り日本語だけが自己表現の道具でした。前大統領の李登輝はその最後の世代のひとりですね。

植民地支配の最大の問題は、政治的抑圧でも経済的搾取でもなく、人間の破壊

にあるのだ、と戴さんはよく言っていました。ことばを奪うことこそは、人間の破壊の具体的なありかたでしょう。ことばとはアイデンティティーそのものですから、ことばを奪われることによって、人は何ものでもないものになってしまうのです。戴國輝の『台湾と台湾人』に収められた「某助教の死と再出発の苦しみ」は、そうした苦しみをとてもみごとに描いたものです。

日本語で書くというのはどういうことなのか、というわれわれ日本人にとってはあたりまえの問題を、自分の文学を考えるために解かなければならない最大の問題として考えつめてきたのは、在日朝鮮人作家たちでした。金石範『ことばの呪縛』や、金時鐘『「在日」のはざま』に収められた「クレメンタインの歌」は、そうした問題を考えるうえで忘れられない文章です。とりわけ「クレメンタインの歌」は、皇国少年であった作者が、日本の敗戦とともに「朝鮮人へ押し返され」、「敗れ去った「日本国」からさえ、おいてけぼりを食わねばならなかった正体不明の若者」として戦後に放り出され、彷徨ののち、クレメンタインの歌という朝鮮語に訳された歌を媒介にして、朝鮮語と朝鮮とを取り戻していく過程をみごとに描いたものです。

ところが台湾ではそんなふうに話が進んでいかないのです。台湾では戦後しばらくは新聞に日本語欄があり、戦前から活躍していた作家たちの表現の場となりました。しかし国民党政府は46年の末にはすべての日本語欄を廃止して、言語を中国語だけに限りました。台湾の各地方議会などでは、日本語欄廃止反対の決議が行われ、日本語の存続が要望されたのですが、すべて無視され、無視されたことが二・二八事件につながっていきました。こうしたいきさつのなかで、日本語はむしろ自分たちのことばとして意識されるようになっていったのです。戦後も日本語で短歌を作り続けていた人たちがいて、その短歌が『台湾万葉集』として日本でも出版されたりしています。

朝鮮の植民地化は、一国あるいは一民族まるごとの植民地化でしたが、台湾の場合は中国の一部が切り離されるかたちで、植民地化が行われました。したがって朝鮮では戦後の出発点は全体に共通のものでしたが、台湾ではそうはいきませんでした。大陸には「中国」が存在しており、そこでの経験と台湾の経験の間に

ギャップがあったからです。朝鮮では、日本の影響を排除して朝鮮を取りもどす作業の出発点は全体に共通するものでしたが、台湾では自分を取りもどすことは大陸に存在していた「中国」を取りもどす、というよりそれを学ぶとかたちにならざるをえず、それは自己の回復とそのまま重なるものではありませんでした。しかも国民党政府は、台湾の経験を日本の奴隷化政策に毒されたものとして全面否定し、みずからの考える「中国」を全面的に取り入れることを強制しました。はじめに述べたように、みずからを唯一正統の「中国」として位置づけるフィクションが、国民党政府の存立基盤に関わることだったからです。こうした戦後過程での国民党政府との対抗関係のなかで、「日本」は台湾の人たちにとってむしろみずからのアイデンティティーを支える要素であるように感じられていったわけです。実際日本語という場合は、国民党をふくむ外省人の入ることのできない場でもありました。以上のようなことは、『一橋論叢』1998年3月の「台湾の日本語文学と台湾語文学」に書きましたので、興味があれば参照してください。

同じ日本の植民地といっても、台湾と朝鮮とではずいぶんと異なっています。以上に述べたことは主として戦後過程の問題なのですが、しかし戦後過程のありかたが、日本時代をどうとらえるかという問題と大きく交差しています。こうした違いについて考えることなく、ただ「日本の植民地支配」というふうに一元的にとらえることは、たいそう安易なことであり、それだけにまた危険なことでもあるように思われます。

さて以上のようなわけでわたしが台湾文学研究を始めたころの関心は、主として日本時代にあったのですが、しかし70年代というのはちょうど台湾に民主化運動の始まった時期でもあり、わたしの興味もそちらのほうに引きつけられていきました。台湾の民主化運動は、70年末ごろの在米台湾人留学生による釣魚台(尖閣)列島保衛運動に始まるといってもいいでしょう。沖縄の日本返還に際して、釣魚台列島が返還の範囲にふくまれていたことに対する在米留学生の抗議から始まった運動は、すぐに島内に波及し、もりあがっていきました。そして71年のニクソン訪中発表、国連の代表権交代とつづく国際環境の激変による台湾の孤立化

は、島内に大きな危機感を呼び起こすことで、一気に民主化運動にはずみをつけ、『大学雑誌』などに集まった知識人たちは、当時の状況のなかで許されるかぎりの社会分析、社会批判を行いはじめました。批判的な言論の場ができはじめたのです。

こうした動きは当時の世界的な新左翼運動の潮流とリンクするもののようにわたしには思われました。在米留学生による運動は、もちろん当時のアメリカのキャンパスにおけるベトナム反戦運動の影響を受けたものだったでしょうし、大陸での文化大革命もまた、既成の共産党を批判する左翼運動というかぎりでは、新左翼的な潮流のなかにあるものと受け取られ、在米の台湾人留学生に刺激を与えていったものと思われまふ。もちろんこうした見かたは、今となつてはかなり考え直さなければならぬ点が多いのですが、しかしそれはまた同時代人としてのわたしの実感でもありました。

当時香港で『七十年代』（のちの『九十年代』）という雑誌が出ていて、国民党の立場でもなく、共産党の立場でもない、批判的な中国論というこの雑誌の立場は、わたしにはとても新鮮なものでした。今から思えばそれは香港というアイデンティティーが明示された最初のものひとつとも言えるかもしれません。この『七十年代』には台湾の記事も載っていて、台湾出身の在米作家の台湾を舞台とする小説、台湾島内ではおそらく発表できなかったらうような小説が掲載されていたのを思い出します。ここでも批判的な言論の場ができはじめていたのです。もちろん批判的な言論の場といえは、日本では独立派による議論がさかんで、それもまた台湾の民主化運動に大きな影響を与えていったのですが、しかし戴さんの議論や、アメリカや香港での議論は、わたしには少し違うもののように見えました。新左翼的な潮流という言いかたでわたしが言おうとしているのは、そういうことです。

ともあれ70年代を通じて台湾の民主化運動は発展していきました。そのことを文学の面で鮮明に表したのが、77、8年の郷土文学論争でした。戦後の台湾文学に最初の大きな転換をもたらしたのは、60年に白先勇らによって創刊された『現代文学』です。『現代文学』は五〇年代の国民党による反共文学を否定し、二十

世紀の西欧現代文学の導入を主張して、文学の自立的立場を確保することになりました。しかし七〇年代に入ると陳映真、王拓といった作家たちが、こうした六〇年代文学を、西欧文学の模倣、台湾の現実と無縁な知識人の遊戯に過ぎないモダニズム文学として批判し、台湾の現実を描くリアリズム文学を主張しはじめます。こうした文学は台湾の社会を描くという意味で、郷土文学と称されることになりました。論争はこうした郷土文学への批判から始まりました。批判者の論点は、第一にこうした文学の実質は社会主義文学であること、第二に台湾という偏狭な地域主義を捨て、「中国」の立場に立つべきこと、などでした。第一の批判は実際そのとおりだったのですが、当時こうした批判は、弾圧につながる厳しいものでした。第二の論点については、王拓らもやはり「中国」の立場を主張していました。ただ批判者の「中国」は、国民党の公式見解としてのそれであったのに対して、王拓らのそれは民衆の立場を鮮明にするナショナリズムとしての「中国」だったのです。釣魚台列島という「領土」を日本から守るというナショナリズムの運動が、国民党批判につながり、民主化運動につながっていったという、台湾の民主化運動のいきさつを思い出してください。批判に対して王拓らは、はっきりと民衆の立場に立って台湾の現実を描くべきことを主張しました。台湾島内でこうした議論が可能になったということそのものに、わたしはまず驚きました。こうして郷土文学は台湾文学の主流になっていったのです。それは文学のみならず、民主化運動にとっても大きな出来事でした。

ちょうど同じ七〇年代に、韓国では詩人の金芝河らが民族の立場を主張していました。民族の立場とは、南北の分断を克服し、民族の全体性を回復しようということで、それは北を敵視する当時の韓国政府への鋭い批判をふくむものでした。また民族の立場を支えるものとしての民衆の立場への投企もそこにはふくまれていました。こうして韓国の民主化運動が始まっていったのです。「もっとも民族的なものは、もっとも民衆的なものである」という金芝河のことばを、『長い暗闇の彼方に』という本で読んだとき、わたしはほかならぬ韓国でこのような立場から文学を考えようとしている詩人がいることに驚き、のちに台湾で同じような議論が起こってきたときにまた驚きました。韓国と台湾の民主化運動は、大きく

異なった文脈を持っているのですが、当時はそうした違いよりも、共通することへの驚きのほうが大きかったように思います。それが70年代という時代だったのでしょう。ともあれ台湾でも韓国でも、大きく動き始めていることが感じられ、同時代の文学のほうに関心が移っていったわけです。ついでに言えば大陸もまた大きく動き始めていました。文化大革命が終わって、新時期文学といわれる新しい文学が興ってきたのは、ちょうど台湾で郷土文学論争が行われていた78年ごろからのことです。

ところで郷土文学論争のなかでのリアリズムとモダニズムの対立ということも、わたしには面白いことに思われました。ひとつには竹内好の「胡適とデューイ」（『日本とアジア』所収）という文章が頭にあったからです。竹内好はこの文章で、徹底したプラグマティストであり、啓蒙者であった胡適が、導火線としての役割は果たしながら、やがて歴史のなかで役割を失っていったことを述べ、「胡適を、歴史から置き去りにしたものについてこそ、学ぶところがなければならぬ」と、書いています。胡適を置き去りにしたものとは、ナショナリズムと中国革命です。またプラグマティズムは、「近代」と言い換えてみてもいいでしょう。竹内好は日本と中国の近代とナショナリズムの意味について考えつづけた人です。その議論はもちろん今日ではそのままに肯定することはできません。しかし少なくとも歴史のある局面でのナショナリズムの意味については、竹内好の考えたことはまだ生きています。郷土文学論争のなかでの、郷土、民族といった言葉の意味を考えながら、台湾という場所は竹内好の方法を深めるための格好の実験場ではないかと思いました。

またリアリズムとモダニズムの問題は、非西欧世界には普遍的に見られる問題なのではないかとも思いました。世界のどこであろうとも、同時代的に存在している以上、二十世紀的な文学の課題を引き受けざるをえません。十九世紀的な安定した人間観の失われたあと、人間存在のあやふやさ、不確かさということと、それを描くための方法意識とが、二十世紀文学の特徴だと思われまふ。現代文学である以上そうした課題は逃れることはできません。しかしまた非西欧の多くの地域では、作家を取りまく現実への批判や、民族、民衆といった課題は、これも

逃れることはできません。後者の課題は時として前者の課題を、不要不急の知識人の遊戯に見せてしまうほどです。リアリズムとモダニズムの問題とは、そうした問題であると思われます。日本でいえば、昭和文学のなかでのプロレタリア文学と新感覚派の問題ですね。

もっともこれはなにも非西欧地域だけに限った問題ではないかもしれません。人間は社会的な存在であって、社会を離れて生きることはできません。その意味では社会は人間にとって本質的なものです。しかし死の前では人間は個人であるしかありません。死や性といった領域では孤立した存在としての人間の不確かさだけが本質的な問題であって、社会は意味を失います。こうした人間というものふたつの側面、社会的な存在としての人間と実存的な存在としての人間と言ってもいいのですが、それをどう全体としてとらえるかということは、大きな問題であって、日本の戦後文学が課題としたのもそれだったのではないかと思います。たとえば埴谷雄高の『死霊』という小説は、こうした課題に革命と存在というかたちでとりくんだ、ちょっと類のない思想小説です。

こんなふうに考えてみると、リアリズムとモダニズムの問題というのは、こうした本質的な問題の非西欧世界的な現れであるのかもしれませんが。そうした地域の文学は成熟している暇などありませんから、問題はやや浅薄で表面的な対立の形をとって現れます。しかしそれだけにそこには本質がむき出しになっているのかもしれない、その帰趨のなかには意外な可能性が含まれていないでもないかもしれません。郷土文学論争をめぐるって漠然とこんなことを考えていたとき、ちょうど大陸では北島らの詩人が、モダニズムの方法によってしか自分たちのリアリティーは表現できないのだと主張し、共産党の文芸政策（つまりリアリズムですね）に対して真っ向から挑戦しはじめていました。そんな大陸と台湾の対照も、わたしにはとても面白いことに思われました。

さて80年代に入ると民主化運動には大きな転換が訪れました。きっかけになったのは79年の美麗島事件（高雄事件）です。美麗島事件というのは民主化運動への大弾圧事件で、先にふれた作家の王拓をはじめ、運動の指導者が根こそぎ捕まりました。また翌年の2月28日（二・二八事件の日です）に、捕まった林義雄の

母と娘ふたりがなにものかに惨殺されるという陰惨な事件が起きました。当時の台湾の雑誌で、見開きの2ページが真っ黒に塗られ、そこに白抜きで大きく「慟」の字が描かれていたのを思い出します。民主化運動は冬の時代に入ったかに思われました。しかし80年の国政選挙では、美麗島事件の被告の家族らがあちこちで立候補し、のきなみ高得票で当選し、81年の地方選挙では、陳水扁（現総統）、謝長廷（現民進党党首）ら美麗島事件の弁護人が当選しました。こうして民主化運動は押しとどめようがなくなったのです。民進党の結成が86年、49年以来しかればなしだった戒厳令が解除されたのが87年、李登輝が総統になったのが88年です。それにともない言論の自由も日に日に獲得されていきました。

言論の自由ということについては、わたしは面白い経験をしています。わたしは共同で翻訳した台湾の現代小説のアンソロジー『彩鳳の夢』という本の解説として「台湾文学の歴史と個性」という文章を書いたのですが、台湾文学の簡単な通史であるこの文章が、じつは三回台湾で翻訳されているのです。それはなにもわたしの文章がいいからではありません。台湾では言えないこと、言にくかったこと、たとえば蒋介石政権への批判や、民主化運動の概略などが書いてあったからで、直接書きにくいことでも、翻訳というかたちでなら公表しやすかったからでしょう。はじめの訳は鍾肇政さんのもので、これはきわどいところは訳してありませんでした。それでもわたしはこんなものを訳していいのかなと思ったものです。次の訳は陳映真さんのもので、これは全訳でしたが、ところどころ伏せ字、つまり「国民党腐敗政権」が「国民党××政権」となるようなものですね、それがありませんでした。でもこんな伏せ字は見ればすぐわかるのですから、陳映真さんはさすがに偉いと思いました。最後の訳は葉石濤さんのもので、これは文字通り全訳でした。そのころには台湾ではもう言いたいことが言えるようになっていて、わたしの文章は用はなくなってしまいました。わずか数年の間に言論の自由が目に見えて獲得されていくのを、身近なこととして体験できたのは、とても面白い経験でした。

こんなふうにして民主化運動が進んでいったわけですが、八〇年代に入るとそれは台湾化として意識されるようになっていきました。はじめに述べたように、

中国全土を代表するというフィクションのもとに台湾の人々の代表権を制限することが、国民党支配の基本的構造でしたから、民主化というのはその中国というフィクションを解体して、真に台湾のみを代表する政権に組み替えることを意味します。民主化は同時に台湾化になるわけです。こうして民主化の進展は台湾意識、台湾ナショナリズムを呼び起こし、また台湾ナショナリズムが民主化を鼓舞していきました。七〇年代との大きな違いはそこにあります。そのきっかけは美麗島事件でした。

さてこんなふうには台湾意識が高まっていくにつれて、八〇年代後半には台湾語で文学をつくらうとする動きが現れてきました。台湾人の思想、感情は、台湾語でなければ表現できないという、その限りでは至極もっともな主張からはじまったこの動きは、やがて台湾語によらない文学は、真の台湾文学とはいえない、といった主張さえ生み出してゆくことになります。

ここで台湾語とは何かを説明しておくほうがいいかもしれません。台湾の人口の73パーセントほどを占める人たちは、福建省南部から台湾へ渡ってきた人たちの子孫で、彼らの言語を閩南語といいます。また12パーセントくらいは客家系の人たちで、その言語は客家語です。さらに2パーセント弱のマレー系原住民族の人たちがいて、その言語はまた部族ごとに異なっています。これら日本の敗戦以前から台湾にいる人たち(本省人)に対して、戦後台湾へ渡ってきた人たちを外省人とといいます。外省人は13パーセントくらいで、その言語は国語だと言っていいでしょう。台湾語とは、閩南語、客家語、原住民族諸語を総称して言うことになりますが、一般には閩南語を台湾語と言っています。閩南語と客家語は、中国語の方言ですが、中国の北方のことばを基礎とした標準語＝国語とはかなり異なっていて、閩南語と国語との違いは、英語とドイツ語の違いよりも大きいと言われます。

はじめのほうで戦後の、日本語から中国語(正確には国語と言うべきでしょう)への言語の切り替えについて述べましたが、じつはそこにはもうひとつ台湾語という要素を加えて考えなければならなかったのです。朝鮮では話しことばとしての朝鮮語と、書きことばとしての朝鮮語の間に、それほど大きなギャップが

あったとは思われません。書きことばとしての伝統がすでにあったからです。だから日本語からの切り替えはさほど問題にならなかったのかもしれませんが。しかし台湾では、閩南語を話せることと、国語が書けることとは、まったく別のことでした。閩南語と、国語の基礎である北方のことばとは大変異なるものだったからです。しかも中国で国語が制定され、文学作品などを通して普及していったのは、台湾が日本の植民地として、日本語を押しつけられていたその期間だったのです。国民党はこの国語を、あまりに性急に日本語と取り替えようとしてきました。日本語欄の廃止がそうです。これが国語（中国語）が外来のことばとして感じられ、日本語がみずからのことばとして感じられたもうひとつの背景です。

国民党の国語政策はその後もますます強硬なものになっていきました。何度も言うように国民党の支配の基本は、台湾の特殊性を否定し、「中国」を強調することで自らの正統性を確立することでした。教育政策はそのための重要な手段で、台湾の歴史を無視して、もっぱら「中国」の歴史を教えたこと、台湾語を否定し国語教育を強化したことなどがそうです。国語の押しつけは、教育や公式の場での国語の強制、テレビなどで台湾語の放送時間を厳しく制限（20パーセント以下）したことなど、社会生活のあらゆる場に及びました。それは台湾の人々にとって、いわば日本語に代わる新しい「外来の言語の押しつけ」と感じられたのです。こうして国語は、国民党の外来性、台湾への抑圧を象徴するものとなり、民主化運動の進展と、台湾本土意識の強まりは、そうした抑圧構造への抵抗として、台湾語の復権要求を生みだしていったのです。公式の場での台湾語の使用は強力な抗議の意思表明ともなりました。また従来台湾語が価値の低いものとされ、抑圧されたものであった分だけ、その復権要求は、それ自身解放としての意味を持っていたものともいえます。台湾語は文学のみならず、映画やロックなどさまざまな表現のなかに取り入れられていきました。

台湾語の復権とは、アイデンティティーの回復を意味します。それは本来日本の敗戦直後から行われるべきことだったのでしょう。台湾の戦後主体の確立を国民党が押しつぶしてきたことによって、それは現在まで持ち越され、民主化運動とともに噴出してきたものとも言えます。しかし戦後すぐの時期であれば、台湾

の取り戻しと、中国の取り戻しとは、敵対的な関係にあるものとは意識されなかったのではないのでしょうか。国民党の支配と冷戦構造とが、このふたつを敵対的なものとしてイデオロギー化し、「台湾」の回復が、「中国」の排除を意味するような構造を形成してきたのではないかと思います。しかしこのことを考えるには、なお大陸での変化など考えなければならないことがたくさんあるように思われますので、ここではこれ以上はふれないことにします。

台湾語をめぐる最近の動きは、わたしにはふたつの意味で面白いものであるように思われます。台湾語の文学が書かれ、また小中学校での台湾語教育の必要が主張されて、01年からは正規のカリキュラムのなかで台湾語の授業が行われはじめました。こうして書きことばとしての台湾語が形成されていくことは、台湾語が方言の地位を抜け出して、独立した言語になっていくことを意味するでしょう。こうした動きは、カリブ諸地域でのクレオール語の復権やクレオール文学の主張などとも重なるものです。つまり多元的社会的追求です。しかしその先には何があるのでしょうか。クレオール語の主張がフランス語の排除を意味しないように、台湾語の独立は国語を排除するものではありません。国語はもはや台湾の人たちの母語として定着しつつあります。またそれは世界の華人社会の共通語でもあります。そうした国語と台湾語のバイリンガル社会を形成していくのだとして、さてそのためのコストと引き替えに何が手に入るのでしょうか。アイデンティティーのマークでしょうか。多元社会的夢でしょうか。こうした問いは、つまるところ真の意味での多元的社会的なものは可能なのか、それとも究極的には英語だけのモノリンガル社会になっていくしかないのか、といった問題とつながるものでしょう。その意味で今台湾で行われつつあることは、大きな意味を持つものであると思われます。クレオール語については流行と言っていいほどにいろいろな人が語っていますが、ついとなりの台湾のこうした実験については、ほとんど知られていないという日本の状況は、とても悲しいものに思われます。

わたしがおもしろいと思うもうひとつのことは、大陸にも閩南語をしゃべる多くの人がいるということです。では大陸では台湾のようなことは起こらないのでしょうか。

もちろん今台湾で起こりつつあることは、いわば国民国家形成の問題です。「中国」という枠組みの国家を解体して、「台湾」という枠組みの国家に作りかえることが課題だからです。だからその国民とは誰なのかというアイデンティティーの問題が、先鋭な政治の問題になるのです。こうした条件は大陸にはありません。

しかし大陸そのものはもともと多元的な社会なのです。そこには多くの少数民族がいますし、漢族の内部だってエスニックな違いと言っていいほど異なった集団がふくまれています。台湾とは違ったかたちであれ、大陸でもまた多元的な社会をめざさざるをえないでしょう。そのとき台湾の経験がどのように大陸に関わっていくのかは、また興味あることだと言わねばなりません。なお台湾語の問題については、『一橋論叢』2000年9月に、「台湾語運動覚書」という文章を書きましたので、参照してください。

以上のようにわたしは台湾文学をめぐっていろいろなことを考えざるをえませんでした。どの問題もまだ正解にたどり着いたようには思えません。しかしこうした複雑さこそが、台湾文学のおもしろさだと思うのです。こうした複雑さは、台湾の文学者にとっては、大きな困難を意味しています。しかしこうした困難のなかで、台湾の文学者たちは、台湾文学という火を絶やすことなく守りつづけてきました。そうした台湾の文学者たちの努力が、台湾文学のおもしろさを保証しているのでもありましょう。

最後に本文中に取りあげた本のデータを書いておきます。興味があれば読んでみてください。また台湾についての概説としては、戴國輝『台湾』、若林正文『台湾』などがあることを付け加えておきます。

- 森宣雄『台湾／日本——連鎖するコロニアリズム』、インパクト出版会、2001.9  
尾崎秀樹『近代文学の傷痕——旧植民地文学論』、岩波同時代ライブラリー、  
1991.6  
呉濁流『アジアの孤児』、新人物往来社、1973  
呉濁流『夜明け前の台湾』、社会思想社、1972

- 戴國煇『台湾と台湾人』, 研文出版, 1979.11  
金石範『ことばの呪縛』, 筑摩書房, 1972.7  
金時鐘『「在日」のはざままで』, 平凡社ライブラリー, 2001.3  
孤蓬万里編著『台湾万葉集』, 集英社, 1994.2  
金芝河, 渋谷仙太郎編訳『長い暗闇の彼方に』, 中央公論社, 1971.12  
竹内好『日本とアジア』, ちくま学芸文庫, 1993.11  
『彩鳳の夢 台湾現代小説選Ⅰ』, 研文出版, 1984.2  
戴國煇『台湾』, 岩波新書, 1988.10  
若林正丈『台湾』, ちくま新書, 2001.11

(一橋大学大学院言語社会研究科教授)